

文・皿木喜久

題字・藤渡辰信

- ①巨大なチリ国旗がひるがえるサンティアゴのモネダ宮前広場。かつて「軍事革命」の舞台となったが、当時から日本の商社マンの活躍の場でもあった (AP)
- ②軍事革命で警戒に当たる兵士たち。3年間の人民連合政権を崩壊させた =1973年9月12日 (ロイター)

紅陵に命燃ゆ



激動の地で活躍「商社マン」

その14 海外雄飛

特に、チリが世界有数の鉱業国であり、中でも銅は世界一の生産量と埋蔵量を誇ることを初めて知った人も多かっただろう。サンホセ鉱山も採掘していたのは銅と金だったという。

そのチリで活躍する日本の商社マンらを描いた小説がある。深田祐介氏の『革命商人』だ。日本の高度成長が続いていた昭和44（1969）年、大手商社、宮井物産の非鉄金属部門のベテラン、平川貞男がチリ・サンティアゴにある現地法人の社長として赴任する。

日本の高度経済成長で増加する電線など銅の需要に対応、ライバル社に対抗して銅の買い付けを増やすためだった。

一方、その現地法人に採用されている社員の岸田洋治は日本のタイヤを売り歩いていた。ふとした機会にチリの陸軍が日本の四輪駆動車をほしがっていることを知り、軍内部に食い込んでいく。



第10代総長の矢部貞治「拓殖大学創立100周年記念『右手に文化の炬をかかげ』から」

矢部貞治（やべ・ていじ） 明治35年、鳥取市生まれ。大正15年、東大法学部卒。同大学の助手、助教授を経て昭和14年から教授（政治学）。近衛文麿のブレーンなどをつとめた。戦後、教授を辞任して政治評論家に。30年から39年まで拓殖大学総長。この間、選挙制度調査会委員、選挙制度審議会副会長のほか、32年から内閣の憲法調査会に参加、憲法改正の立場から副会長、同起草委員長などを歴任した。著書に『政治学』『近衛文麿』『民主主義の基本問題』など。昭和42年5月死去。享年64。

だが順調にいきかかっていた昭和45（1970）年9月、大統領選でマルクス主義を信奉するサルバドル・アジェンデが当選、左派の人民連合政権が誕生する。アジェンデ政権は米国籍銅山など多くの企業を国有化しては、社会主義政策を強めていく。

岸田らは、チリ中に日本の車を走らせようと、現地での自動車工場

の建設を売り込んでいた。しかしアジェンデの人民連合政権にリベリトを贈るなどして接近したほかの日本商社に出し抜かれる。銅山の国有化による生産減などもあり、宮井物産は苦境に陥る。

「軍事革命」も経験する

しかしあまりに過激な社会主義化で、チリ国内の生産性が落ち、食糧危機や物資不足が深刻と

「アジア興隆の塩になれ」

チリだけではない。戦後日本の商社マンたちは、世界中の内戦状態の国や人跡未踏の地にまで入り込んだ。そこで資源の獲得にあたり、プラント建設を売り込んだり、モノづくりとともに、経済大国・日本の牽引車になったことは間違いなく。

産経新聞が連載、単行本ともなった『戦後史開封』によれば、昭和36年、「牧場主が鉄鉱石を拾った」というオーストラリアからの一報でかけつけた丸紅飯田の担当者らは、砂漠の真ん中の香川県ほどもある牧場で、5年間も調査に当たった。

なる。「虐げられた中産階級」を中心に、アジェンデ政権への反発が強まった。

これを受けて、昭和48（1973）年9月、陸海空三軍を中心とした「軍事革命」が起きる。アジェンデは自殺に追い込まれ、世界から注目された「暴力革命」による社会主義政権は、わずか3年で崩壊した。

代わってアウグスト・ピノチェトによる軍事政権が生まれた。岸田らは再び日本製車の販売を広げていく。

以上はむろん小説であり、商社料理屋を経営している。

ほぼそっくり描かれているとみていいだろう。登場する日本人も実在の人物にヒントを得ている。

主役の一人である岸田は北海道出身で、理科大学在学中に叔母のいるチリに行くことを決意、拓殖大学に入り直してスペイン語を学んだことになっている。

この岸田は、拓殖の商学部貿易学科を出て昭和34年チリに渡り、チリ三井物産に入社した岸野友治がモデルだとされる。岸野はその後、トヨタ・チリの社長などをつとめ、現在、サンティアゴで日本料理屋を経営している。

「海外雄飛」を掲げる拓殖大学は戦前から、『革命商人』の岸田のように海外で活躍する人材を輩出し続けてきた。

学校創立から18年たった大正7（1918）年の統計によると、それまでの卒業生1075人のうち64%までがいわゆる「外地」に住んでいた（拓殖大学百年・小史『世界に天駆けた夢と群像』）という。

戦後も、昭和30年に総長に就任した矢部貞治は翌年の入学式の告示で「アジアの興隆の塩になり、日本再建の塩になる」と呼びかけた。聖書を引用する形で海外雄飛の必要性を訴えたのだ。

矢部とコンビを組んだ理事長の西郷隆秀もこの方針を受け、教育の充実につとめ、特に語学については一段と拡充をはかった。このため、海外に出るためにわざわざ拓殖大学に入り直す学生も多かったという。

大学関係者は卒業生名簿で、日本国内で働いていると、肩身の狭い思いがしたそうです」と語る。（敬称略、毎週土曜掲載）

最初ほとんど野宿で、毒ヘビや毒グモも戦いながらだった。その結果、埋蔵量36億トという高品位鉱山を発見する。

ベトナム戦争末期の昭和50年3月、南ベトナムのサイゴン近郊で丸紅社員らが中心となり、火力発電のために据えつける重電機プラントの試運転にあたっていた。

北ベトナム軍のロケット弾も飛んできた。日本への引き揚げ論も強かったが、最後まで踏み張り、サイゴン陥落の数日前に試運転を終えた。